

# 絵合

## 渋谷栄一訳

### 第一章 前斎宮の物語 前斎宮をめぐる朱雀院と光る源氏の確執

「第一段 朱雀院、前斎宮の入内に際して贈り物する」

前斎宮のご入内のこと、中宮が御熱心に御催促申される。こまこまとしてお世話まで、これといったご後見役もないとご心配になるが、大殿は朱雀院がお聞きあそばすことにはばかりなさって、二条の院にお迎え申すことをも、この度はご中止になって、まったく知らない顔に振る舞っていらっしゃるが、一通りの準備は、受け持つて親のように世話してお上げになる。

朱雀院はたいそう残念に思し召されるが、体裁が悪いので、お手紙なども絶えてしまっていたが、その当日になって、何ともいえない素晴らしいご装束の数々、お櫛の箱、打乱の箱、香壺の箱など幾つも、並大抵のものでなく、いろいろのお薫物の数々、薫衣香のまたとない素晴らしいほどに、百歩の外を遠く過ぎてても匂うくらい、特別に心をこめてお揃えあそばした。内大臣が御覧になるうからと、前々から御準備あそばしていたのであるうか、いかにも特別誂えといった感じのようである。

殿もお渡りになっていた時なので、「これこれの次第で」と言って、女別当が御覧に入れさせる。ちよっと、お櫛の箱の片端を御覧になると、この上もなく精巧で優美に、めったにない作りである。さし櫛の箱の心葉に、「別れの御櫛を差し上げましたが、それを口実に、あなたとの仲を遠く離れたものと神がお決めになったのでしゅうか」

大臣、これを御覧になって、いろいろとお考えめぐらすと、たいそう恐

れ多く、おいたわしくて、「ご自分の性癖の、ままならぬ恋に惹かれるわが身をつまされて、

「あのお下りになつた時、お心にお思いになつただるうこと、このように何年も経つてお帰りになつて、そのお気持ち遂げられる時に、このように意に反することが起こつたのを、どのようにお思いであるう。御位を去り、もの静かに過ごしていらして、世を恨めしくお思いだるうか」などと、自分がその立場であつたなら、きつと心を動かさずにはいられないだるう」と、お思い続けなされると、お気の毒になつて、「どうしてこのような無理強引なことを思いついて、おいたわしくお苦しめ悩ますのだるう。恨めしいとも、お思い申したが、また一方では、お優しく情け深いお気持ちの方を」などと、お思い乱れなさつて、しばらくは物思いに耽つていらつしやうた。

「このご返歌は、どのように申し上げあそばすのでしゅうか。また、お手紙はどのように」

などと、お尋ね申し上げなさるが、とても具合が悪いので、お手紙はお出しになれない。宮はご気分も悪そうにお思いになつて、「ご返事をとても億劫になさつたが、

「ご返事申されないのも、とても情けなく、恐れ多いことではしゅう」と、女房たちが催促申し上げ困つている様子をお聞きになつて、

「とても良くないことです。かたちだけでもご返事差し上げなさいませ」と申し上げなさるにつけても、ひどく恥ずかしいが、昔のことをお思い出しになると、たいそう優しくお美しくいらして、ひどくお泣きになつたご様子を、どこことなくしみじみと拝見なさつた子供心にも、つい昨日のことと思われると、故御息所のお事など、それからそれへとしみじみと悲しく思ひ出さずにはいらつしやれないので、ただこのように、

「別れの御櫛をいただいた時に仰せられた一言が、帰京した今となつては悲しく思われます」

と、ぐらいいにあつたのであるうか。お使いへの禄、身分に応じてお与えになる。大臣は、お返事をひどく御覧になりたくお思いになつたが、お口にはお出しになれない。

「第二段 源氏、朱雀院の心中を思いやる」

「院のご様子は、女性として拝見したい美しさだが、この宮のご様子も不似合いでなく、とても似つかわしいお間柄のようであるが、主上は、まだとてもご幼少でいらつしやるようなので、このように無理にお運び申すことを、人知れず、不快にお思いでいらつしやるうか」などと、立ち入つたことまで想像なさつて、胸をお痛めになるが、今日になつて中止するわけにもいかないの、万事しかるべきさまにお命じになつて、ご信頼になつてゐる参議兼修理大夫に委細お世話申し上げるべくお命じになつて、宮中に参内なさつた。

「表立つた親のようには、お考えいただかれないように」と、院にご遠慮申されて、ただご挨拶程度と、お見せになつた。優れた女房たちが、もともと大勢いる宮邸なので、里に引き籠もりがちであつた女房たちも参集して、実にまたとなく、その感じは理想的である。

「ああ、生きていらしたら、どんなにかお世話の仕甲斐のあることに思つてお世話なさつたことだろう」と、故人のご性質をお思い出しになるにつけて、特別な関係を抜きにして考えれば、まことに惜しむべきお人柄であつたよ。ああまではいらつしやれないものだ。風流な面では、やはり優れて」と、何かの時々にはお思い出し申し上げなさる。

### 「第三段 帝と弘徽殿女御と齋宮女御」

中宮も宮中においであそばしたのであつた。主上は、新しい妃が入内なさるとお耳にあそばしたので、たいそういじらしく緊張なさつていらつしやる。お年よりはたいそうおませで大人びていらつしやる。中宮も、

「このような立派な妃が入内なさるのだから、よくお氣をつけてお会い申されませ」

と申し上げなさるのであつた。

お心の中で、大人の妃は氣がおけるのではなからうか」とお思いであつたが、たいそう夜が更けてからご入内なさつた。実に憤み深くおつとりして、小柄で華奢な感じがしていらつしやるので、たいそうおきれいなとお思いになつたのであつた。

弘徽殿女御には、おなじみになつていらしたので、親しくかわいく氣がねなくお思いになり、この方は、人柄も実に落ち着いて、氣が置けるほどで、内大臣のご待遇も丁重で重々しいので、軽々しくはお扱いできにくく自然お思いになつて、御寝の伺候などは対等になるが、氣を許した子供どうしのお遊びなどに、昼間などにお出向きになることは、あちら方に多くいらつしやる。

権中納言は、考えるところがあつてご入内おさせ申したのだが、このように入内なさつて、ご自分の娘と競争する形で伺候なさるのを、何かにつけて穏やかならずお思いのようである。

### 「第四段 源氏、朱雀院と語る」

院におかせられては、あの櫛の箱のお返事を御覧になつたにつけても、お諦めにくくお思いであつた。

そのころ、内大臣が参上なさつたので、しみじみとお話なさつた。事のついでに、齋宮がお下りになつたこと、以前にもお話し出されたので、お口に出されたが、あのように恋い慕つていたお氣持があつたなどは、お打ち明けになれない。大臣も、このようなご意向を知つてゐるふうにはお出しにならず、ただ、どうお思いでいらつしやるか」とだけ知りたくて、何かとあの御事をお話に出されると、御傷心の御様子、並々ならず窺えるので、たいそう氣の毒にお思いになる。

「素晴らしい器量だと、御執着していらつしやるご容貌、いったいどれほどの美しさなのか」と、拝見したくお思い申されるが、まったく拝見おできになれないのを悔しくお思いになる。

まことに重々しくて、飯にも子どもつばいお振る舞いなどがあれば、自然とちらりとお見せになることもあろうが、奥ゆかしいお振る舞いが深くなつていく一方なので、拝見するにつれて、実に理想的だとお思い申し上げた。

このように隙間もない状態で、お二方が伺候していらつしやるので、兵部卿宮、すらすらとはご決意になれず、主上が、御成人あそばしたら、いくらなんでも、お見捨てあそばすことはあるまい」と、その時機をお待ち

になる。お二方の御寵愛は、それぞれに競い合つていらつしやる。

## 第二章 後宮の物語 中宮の御前の物語絵合せ

「第一段 権中納言方、絵を集める」

主上は、いろいろのことの中でも、特に絵に興味をお持ちでいらつしやつた。取り立ててお好みあそばすせいか、並ぶ者がなく上手にお描きあそばす。斎宮の女御、たいそう上手にお描きあそばすことができるので、この方にお心が移つて、しじゅうお渡りになつては、互いに絵を描き心を通わせ合つていらつしやる。

殿上の若い公達でも、この事を習つ者をお目に掛けになり、お気に入りにあそばしたので、なおさらのこと、お美しい方が、趣のあるさまに、型にはまらずのびのびと描き、優美に物に寄り掛かつて、ああかこつかと筆を止めて考えていらつしやるご様子、そのかわいらしさにお心捉えられて、たいそう頻繁にお渡りあそばして、以前にもまして格段に御寵愛が深くなつたのを、権中納言、お聞きになつて、どこまでも才気煥発な現代風なご性格で、自分は人に負けるものか」と心を奮い立てて、優れた名人たちを呼び集めて、厳重な注意を促して、またとない素晴らしい絵の数々を、またとない立派な幾枚もの紙に描き集めさせなされる。

「第二段 源氏方、須磨の絵日記を準備」

「とりわけ物語絵は、趣向も現れて、見所のあるものだ」

と言つて、おもしろく興味ある場面ばかりを選んで描かせなされる。普通の月次の絵も、目新しい趣向に、詞書を書き連ねて、御覧に供される。

特別に興味深く描いてあるので、また、こちらで御覧あそばそうとするのと、気安くお取り出しにならず、ひどく秘密になさつて、こちらの御方へ御持参あそばそうとするのを惜しんで、お貸しなされないの、内大臣、お聞きになつて、

「相変わらず、権中納言のお心の大人げなさは、変わらないな」  
などとお笑いになる。

「むやみに隠して、素直に御覧に入れず、お気を揉ませ申すのは、ひどくけしからぬことだ。古代の御絵の数々、ございます、差し上げましょう」

と奏上なさつて、殿に古いのも新しいのも、幾つもの絵の入つている御厨子の数々を開けさせになさつて、女君と一緒に、現代風なのは、これだあれだ」と、お選び揃えなされる。

「長恨歌」「王昭君」などのような絵は、おもしろく感銘深いものだが、縁起でないものは、このたびは差し上げまい」とお見合わせになる。

あの旅の御日記の箱をもお取り出しになつて、この機会に、女君にもお見せ申し上げになつたのであつた。ご心境を深く知らなくて今初めて見る人でさえ、多少物の分かるような人ならば、涙を禁じえないほどのしみじみと感銘深いものである。まして、忘れがたく、その当時の夢のような体験をお覚ましになる時とてないお二方にとつては、当時に戻つたように悲しく思い出さずにはいらつしやれない。今までお見せにならなかつた恨み言を申し上げなされるのであつた。

「独り京に残つて嘆いていた時よりも、海人が住んでいる 干潟を絵に描いていたほうがよかつたわ 頼りなさも、慰められもしましたでしょうに」  
とおつしやる。まことにもつともだと、お思いになつて、

「辛い思いをしたあの当時よりも、今日はまた 再び過去を思い出していつそ涙が流れて来ます」

中宮だけにはせひともお見せ申し上げなければならぬものである。不出来でなさそうなのを一帖ずつ、何といつても浦々の景色がはつきりと描き出されているのを、お選びになる折にも、あの明石の住居のことが、まっさきに、どうしているだろうかと、お思いやりにならない時がない。

「第三段 三月十日、中宮の御前の物語絵合せ」

このように幾つもの絵を集めていらつしやるとお聞きになつて、権中納言、たいそう対抗意識を燃やして、軸、表紙、紐の飾りをいつそ調えなされる。三月の十日ころなので、空もうららかに、人の心ものびのびとし、ちょ

うごよい時期なので、宮中あたりでも、節会と節会の合間なので、ただこのようなことをして、どなたもどなたもお過ごしになっていらつしやるのを、同じことなら、いっそう興味深く御覧あそばされるようにして差し上げようとお考えになって、たいそう特別に集めて献上させなされた。

こちら側からとあちら側からと、いろいろと多くあつた。物語絵は、精巧でやさしみがまさつているようなのを、梅壺の御方では、昔の物語、有名で由緒ある絵ばかり、弘徽殿の女御方では、現代のすばらしい新作で、興味ある絵ばかりを選んで描かせなされたので、一見したところの華やかさでは、実にこの上なく勝つていた。

主上付きの女房なども、絵に嗜みのある人々はすべて、これはどうの、あれはどうの、などと批評し合うのを、近頃の仕事にしているようである。

#### 「第四段「竹取」対「宇津保」」

中宮も参内あそばしていらつしやる時なので、あれやこれや、お見逃しになれなくお思いのことなので、御勤行も怠りながら御覧になる。この人々が銘々に議論しあうのを聞きあそばして、左右の組にお分けあそばす。

梅壺の御方には、平典侍、侍従内侍、少将命婦。右方には、大式典侍、中将命婦、兵衛命婦を、当時のすぐれた識者たちとして、思い思いに論争する弁舌の数々を、興味深くお聞きになって、最初、物語の元祖である『竹取の翁』と『宇津保の俊蔭』を番わせて争う。

「なよ竹の代々に歳月を重ねたこと、特におもしろいことはないけれども、かぐや姫がこの世の濁りにも汚れず、遙かに気位も高く天に昇つた運勢は立派で、神代のこの世のようなので、思慮の浅い女には、きつと分らないでしょう」と言う。右方は、

「かぐや姫が昇つたという雲居は、おつしやるとおり、及ばないことなので、誰も知ることができません。この世での縁は、竹の中に生まれたので、素性の卑しい人と思われます。一つの家の中は照らしたでしょうが、宮中の恐れ多い光と並んで妃にならずに終わってしまいました。阿部の御主人が千金を投じて、火鼠の裘に思いを寄せて片時の間に消えてしまったのも、まことにあつけないことです。車持の親王が、真実の蓬萊の神秘の事情を知

りながら、偽つて玉の枝に疵をつけたのを欠点とします」

絵は、巨勢相覧、書は、紀貫之が書いたものであつた。紙屋紙に唐の綺を裏張りして、赤紫の表紙、紫檀の軸、ありふれた表装である。

「俊蔭は、激しい波風に溺れ、知らない国に流されましたが、やはり、目ざしていた目的を叶えて、遂に、外国の朝廷にもわが国にも、めつたにない音楽の才能を知らせ、名を残した昔の伝えからいうと、絵の様子も、唐土と日本とを取り合わせて、興味深いこと、やはり並ぶものはありません」と言う。白い色紙、青い表紙、黄色の玉の軸である。絵は、飛鳥部常則、書は、小野道風なので、現代風で興味深そうで、目もまばゆいほどに見える。左方には、反論の言葉がない。

#### 「第五段「伊勢物語」対「正三位」」

次に『伊勢物語』と『正三位』を番わせて、また結論がでない。これも、右方は興味深く華やかで、宮中あたりをはじめとして、近頃の様子を描いたのは、興味深く見応えがする。

平典侍は、  
『伊勢物語』の深い心を訪ねないで、単に古い物語だからといって価値まで落としてよいものでしょうか、世間普通の色恋事のおもしろおかしく書いてあることに気押されて、業平の名を汚してよいものでしょうか」と、反論しかねている。右方の大式の典侍は、

「雲居の宮中に入った『正三位』の心から見ますと、『伊勢物語』の千尋の心も遙か下の方に見えます」

「兵衛の大君の心高さは、なるほど捨てがたいものですが、在五中將の名は、汚すことはできませんまい」

と仰せになって、中宮は、  
「ちよつと見た目には古くさく見えましようが、昔から名高い『伊勢物語』の名を落とすことができましようか」

このような女たちの論議で、とりとめもなく優劣を争うので、一巻の判定に数多くの言葉を尽くしても容易に決着がつかない。ただ、思慮の浅い若い女房たちは、死ぬほど興味深く思っているが、主上づきの女房も、中

宮づきの女房も、その一部分さえ見ることができないほど、たいそう隠していらっしゃった。

### 第三章 後宮の物語 帝の御前の絵合せ

「第一段 帝の御前の絵合せの企画」

内大臣が参上なさって、このようにそれぞれが優劣を競い合っている気持ちをおもしろくお思いになって、

「同じことなら、主上の御前において、この優劣の決着をつけましょう」と、おっしゃるまでになった。このようなこともあるつかと、以前からお思いになっていたので、その中でも特別なのは選び残していらっしゃったが、あの「須磨」「明石」の二巻は、お考えになるところがあつて、お加えになったのであつた。

権中納言も、そのお気持ちは負けていない。最近の世では、ただこのような美しい紙絵を描えること、世の中の流行になっていた。

「今新たに描くことは、つまらないことだ。ただ持っているものだけで」とおっしゃったが、権中納言は他人にも見せないで、秘密の部屋を準備して、お描かせになったが、院におかれても、このような騒ぎがあるとお耳にあそばして、梅壺に幾つかの御絵を差し上げなされた。

一年の内の数々の節会のおもしろく興趣ある様子を、昔の名人たちがそれぞれに描いた絵に、延喜の帝がお手ずからその趣旨をお書きあそばしたのもや、また御自身の御世のこともお描かせになった巻に、あの齋宮がお下りになった日の、大極殿での儀式を、お心に刻みこまれてあつたので、描くべきさまを詳しく仰せになって、巨勢公茂がお描き申したのが、たいそう素晴らしいのを差し上げなされた。

優美に透かし彫りのある沈の箱に、同じ趣旨の心葉のさまなど、実に現代的である。お便りはただ口上だけで、院の殿上に伺候する左近中将をこ使者としてあつた。あの大極殿の御輿を寄せた場面の、神々しい絵に、

「わが身はこのように内裏の外にありますが、あの当時の気持ちは今でも忘

れずにあります」

とだけある。お返事申し上げなさらないのも、たいそう恐れ多いので、辛くお思いになりながら、昔のお簪の端を少し折って、

「内裏の中は昔とすつかり変わってしまった気がして、神にお仕えしていた昔のことが今は恋しく思われます」

とお書きになって、縹の唐の紙に包んで差し上げなされる。ご使者への祿などは、たいそう優美である。

院の帝が御覧になって、限りなくお心がお動きになるにつけ、御在位中のころを取り戻したく思召すのであつた。内大臣をひどいとお思い申しあそばしたことである。過去の御報いでもあつたのである。うか。

院の御絵は、大后の宮から伝わって、あの弘徽殿の女御のお方にも多く集まっているのである。尚侍の君も、このようなご趣味は人一倍優れていて、興味深い絵を描かせては集めていらっしゃる。

「第二段 三月二十日過ぎ、帝の御前の絵合せ」

何日と決めて、急なようであるが、興味深いさまにちよつと設備をして、左右の数々の御絵を差し出させなされる。女房が伺候する所に玉座を設けて、北と南とにそれぞれ分かれて座る。殿上人は、後涼殿の簀子に、それぞれが心を寄せながら控えている。

左方は、紫檀の箱に蘇芳の華足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染めの唐の綺である。童六人、赤色に桜襲の汗衫、裨は紅に藤襲の織物である。姿、用心意など、並々でなく見える。

右方は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、脚結いの組紐、華足の趣など、現代的である。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の裨を着ている。皆、御前に御絵を並べ立てる。主上つきの女房、前に後に、装束の色を分けている。

お召しがあつて、内大臣、権中納言、参上なさる。その日、帥宮も参上なさつた。たいそう風流でいらっしゃるうちでも、絵を特にお嗜みでいらっしゃるので、内大臣が、内々お勧めになつたのもある。うか、仰々しいお招きではなくて、殿上の間にいらっしゃるのを、御下命があつて御前に参

上なざる。

この判者をお勤めになる。たいそう、なるほど上手に筆の限りを尽くしたいくつもの絵がある。全然判定することがおできになれない。

例の四季の絵も、昔の名人たちがおもしろい画題を選んで、筆もすらすらと描き流してある風情、譬えようがないと見ると、紙絵は紙幅に限りがあつて、山水の豊かな趣を現し尽くせないものなので、ただ筆先の技巧、絵師の趣向の巧みさに飾られているだけで、当世風の浅薄なもの、昔のに劣らず、華やかで実におもしろい、と見える点では優れていて、多数の論争なども、今日は両方ともに興味深いことが多かつた。

朝餉の間の御障子を開けて、中宮も御覧になつていらつしやるので、深く絵に御精通であろうと思つと、内大臣もたいそう素晴らしいと思ひになつて、所々の判定の不安な折々には、時々ご意見を述べなかつた様子、理想的である。

「第三段 左方、勝利をおさめる」

勝負がつかないで夜に入った。左方、なお一番残つている最後に、須磨の絵巻が出て来たので、権中納言のお心、動揺してしまつた。あちらでも心づもりして、最後の巻は特に優れた絵を選んでいらつしやつたのだが、このような大変な絵の名人が、心ゆくばかり思いを澄ませて心静かにお描きになつたのは、譬えようがない。

親王をはじめまいらせて、感涙を止めることがおできになれない。あの当時に、「お気の毒に、悲しいこと」とお思ひになつた時よりも、お過ごしになつたという所の様子、どのようなお気持ちでいらしたかなど、まるで目の前のことのように思われ、その土地の風景、見たこともない浦々、磯を隈なく描き現していらつしやつた。

草書体に仮名文字を所々に書き交せて、正式の詳しい日記ではなく、しみじみとした歌などが混じつている、その残りの巻が見たいくらいである。誰も他人事とは思われず、いろいろな御絵に対する興味、これにすっかり移つてしまつて、感慨深く興味深い。万事みなこの絵日記に譲つて、左方、勝ちとなつた。

#### 第四章 光る源氏の物語 光る源氏世界の黎明

「第一段 学問と芸事の清談」

夜明けが近くなつたところに、何となくしみじみと感慨がこみ上げてきて、お杯など傾けなざる折に、昔のお話などが出てきて、

「幼いころから、学問に心を入れておりましたが、少し学才などがつきそうに御覧になつたのでしようか、故院が仰せになつたことに、学問の才能というものは、世間で重んじられるからであるうか、たいそう学問を究めた人で、長寿と、幸福とが並んだ者は、めつたにいないものだ。高い身分に生まれ、そうしなくても人に劣ることのない身分なのだから、むやみにこの道に深入りするな」と、お諫めあそばして、正式な学問以外の芸を教えてくださいなさいましたが、出来の悪いものもなく、また特にこのことはと上達したこともございませんでした。ただ、絵を描くことだけが、妙なつまらないことですが、どうしたら心のゆくほど描けるだろうかと、思つ折々がございましたが、思いもよらない賤しい身の上となつて、四方の海の深い趣を見ましたので、まつたく思い至らぬ所のないほど会得できましたが、絵筆で描くにはは限界がありまして、心で思うとおりには事の運びぬように存じられましたが、機会がなくて、御覧に入れるわけにも行きませんので、このように物好きのようなのは、後々に噂が立ちましようかと、

と、親王に申し上げなされると、何の芸道も、心がこもつていなくては習得できるものではありませんが、それぞれの道に師匠がいて、学びがいのあるようなものは、度合の深さ浅さは別として、自然と学んだだけの事は後に残るでしょう。書画の道と暮を打つことは、不思議と天分の差が現れるもので、深く習練したと思えぬ凡愚の者でも、その天分によつて、巧みに描いたり打つたりする者も出て来ますが、名門の子弟の中には、やはり拔群の人がいて、何事にも上達すると見えました。故院のお膝もとで、親王たち、内親王、どなたもいろいろさまざまなお稽古事を習わさせなかつたことがありましようか。その中でも、特にご熱心になつて、伝授を受けご習得なかつた甲斐があつて、詩文

の才能は言うまでもなく、それ以外のことの中では、琴の琴をお弾きになることが第一番で、次には、横笛、琵琶、箏の琴を次々とお習いになった』と、故院も仰せになっていました。世間の人、そのようにお思い申し上げていましたが、絵はやはり筆のついでに慰み半分之余技と存じておりましたが、たいそうこんな不都合なくらいに、昔の墨描きの名人たちが逃げ出してしまふようなのは、かえって、とんでもないことです」

と、酔いに乱れて申し上げなされて、酔い泣きであろうか、故院の御事を申し上げて、皆涙をお流しになった。

「第二段 光る源氏体制の夜明け」

二十日過ぎの月がさし出して、こちら側は、まだ明るくないけれども、いったいに空の美しいころなので、書司のお琴をお召し出しになって、和琴、権中納言がお引き受けなさる。そうは言っても、他の人以上に上手にお弾きになる。帥親王、箏の御琴、内大臣、琴の琴、琵琶は少将の命婦がおつとめする。殿上人の中から勝れた人を召して、拍子を仰せつけになる。たいそう興趣深い。

夜が明けていくにつれて、花の色も人のお顔形なども、ほのかに見えてきて、鳥が囀るころは、快い気分がして、素晴らしい朝ぼらけである。禄などは、中宮の御方から御下賜なさる。親王は御衣をまた重ねて頂戴なさる。

「第三段 冷泉朝の盛世」

その当時のことくさには、「この絵日記の評判をなさる。

「あの浦々の巻は、中宮にお納めくだらう」

とお申し上げさせになったので、この初めの方や、残りの巻々を御覧になりたくお思いになったが、

「ごそれそのうち、再し再し」

とお申し上げさせになる。主上におかせられても、御満足に申し召していらつしやるのを、嬉しくお思い申し上げなさる。

ちよつとしたことにつけても、このようにお引き立てになるので、権中納言は、「やはり、世間の評判も圧倒されるのではなからうか」と、悔しくお思いのようである。主上の御愛情は、初めから馴染んでいらつしやつたので、やはり、御寵愛厚い御様子も、人知れず拝見し存じ上げていらつしやつたので、頼もしく思い、「いくら何でも」とお思になるのであった。

しかるべき節会などにつけても、「この帝のご時代から始まったと、末の世の人々が言い伝えるであろうような新例を加えよう」とお思いになり、私的なこのようになちよつとしたお遊びも、珍しい趣向をお凝らしになって、大変な盛りの御代である。

「第四段 嵯峨野に御堂を建立」

内大臣は、やはり無常なものと世の中をお思いになって、主上がもう少し御成人あそばすのを拝したら、やはり出家しようとお思いのようである。

「昔の例を見たり聞いたりするにも、若くして高位高官に昇り、世に抜きん出てしまった人で、長生きはできないものなのだ。この御代では、身のほど過ぎてしまった。途中で零落して悲しい思いをした代わりに、今まで生き永らえたのだ。今後の栄華は、やはり命が心配である。静かに引き籠もつて、後の世のことを勤め、また一方では寿命を延ばそう」とお思いになって、山里の静かな所を手に入れて、御堂をお造らせになり、仏像や経巻のご準備をさせていらつしやるらしいけれども、幼少のお子たちを、思うようにお世話しようとお思いになるにつけても、早く出家するのは、難しそうですね。どのようにお考えなのかと、まことに分からない。

